

医用画像論文特集の発行にあたって



医用画像論文特集編集委員会

委員長 藤田 広志

医用画像技術は、常に世の中の最先端を走り続けているといっても過言ではない。また、人の命にも大きく関わる技術であることも多く、一般市民からもその開発への期待は常に大きい。このような医用画像に関する本学会における研究活動は、1999年4月に医用画像研究会 (MI) が発足し、ますます急速に進展している。その活動の一環として、2000年1月の「次世代医用画像技術」論文特集、2004年1月の「医用画像の最先端」論文特集、2008年7月の「医用画像」論文特集の発刊を実施しており、今回の特集はこれらに続く第四弾である。前特集から今回の特集に至る間には、学会論文誌は完全電子化が達成されており、また、英文誌への論文投稿数が和文誌へのそれをはるかに超える状況へと大きな変化が起きている。そこで今回の特集では、英文誌 (IEICE Trans. Inf. & Syst., D) と同時発行の特集を企画することとなった。

今回の特集では、招待論文2編、論文17編、レター4編の投稿があった。特集編集委員会で迅速かつ丁寧に審議した結果、招待論文2編、論文11編、レター3編を採択することになった。したがって、採択率は69.6%であり、前号の37.5%に比べて大きく上回る数値で、良質な論文が投稿された証左でもあろう。また、英文誌特集では、サーベイ論文2編 (2編採択)、論文24編 (7編採択)、レター4編 (2編採択) で、36.7%の採択率であった。なお、今回の特集号に残念ながら不採択となった論文には、本誌の査読システムの制約条件のために間に合わない論文も多く含まれており、是非とも査読コメントを参考の上、通常号に早期の再投稿をお勧めしたい。

2編の招待論文は、それぞれ統計形状モデルと定量的病理診断の最新動向について執筆頂いた。一般投稿論文は、イメージング、統計モデル解析、臓器・病変抽出などのコンピュータ支援診断の基礎技術からシステム開発までと、医用画像の分野らしく誠に広範囲であった。なお、英文誌の2編のサーベイ論文は、それぞれ胸部と大腸CAD (コンピュータ支援診断) における機械学習、コンピュータ支援外科領域における統計モデルと機械学習に関するものである。英文論文は今回、全てオープンアクセスが試行されるので、会員/非会員を問わず、この機会に是非ともアクセス頂き、多くの方々に御一読頂きたい。

最後に、優れた研究成果を投稿して下さった著者の方々、投稿論文を丁寧に閲読して頂いた査読委員の方々、査読結果を踏まえて厳正な審査と著者への適切なフィードバックをして頂いた編集委員の方々、編集委員会実務の円滑な進行に尽力頂いた副編集委員長並びに編集幹事の諸氏、本企画をサポート頂いた和文論文誌D編集委員会の関係各位、そして煩雑な事務作業に御協力頂いた学会事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。

藤田 広志 (正員:フェロー) 1976岐阜大・工・電気卒。1978同大学院工学研究科電気工学専攻修士課程了。同年岐阜高専助手、1986同助教授。この間、1983～1986シカゴ大客員研究員。1991岐阜大・工・助教授、1995同教授、2002同大学院医学系研究科教授。工博 (名大)。医療分野における画像情報処理 (特に、コンピュータ支援診断システムの開発) などの研究に従事。2007、2008年度本会医用画像研究会専門委員会専門委員長を務める。医用画像情報学会 (会長)、IEEE、SPIE各会員。

